

課題研究「社会化理論と教育研究」

社会化過程と educability に関する覚書

萩原元昭

群馬大学

1. 若干の問題状況

集団のなかの個人

OECD教育調査団の指摘をまづきてもなく、今日ほど異なる社会集団間の *dyscommunication* が顕在化している時代はない。実田はこのような社会集団の特質と身分制原理と自然村的秩序(部落意識)の相違を規定のなしいし、村立・予盾関係としていわけ日本社会に貫徹する原型としてとらえ、後者について(1)個人の内面主張を排し(2)情緒的融合を高め(3)階層的差別を隠蔽し(4)集団内の平和を保つと同時に(5)集団外に對しては冷酷な闘争を促す点をもつ特色としてあげている。したがって個人は「身分的に全人格的に規定される」が「集団のなかには完全に埋没してしまふ」からいすれば、自由な個人は存在し難い状況のなかにおかれている。社会集団が伝統的にあたがいなコミュニケーションを断つことによって村立を避けようとしてきたのもこの原理による。戦後身分制に代わって民主主義と多少とも共通点をもち個人を埋没という点で基本的に異なる部落制が日本人意識の原理としての位置を占めたのも実はこの近代的自我の未成熟にその要因を求めることができるといわれている。ところがこのような個人主義の否定という意識はなかなかナカズムにより形成されたいものである。これはまさしく日本人の社会化と教育に関わる基本的な問題である。

学歴・知識の偏重

子どもが家族、仲間、学校、職場と主要な社会化の機関を通過してゆくなかで最も発達への影響を受けるのは社会階層であるといわれている。しかし新堀は「中等教育以下の学歴は階層的背景に結びついているが学力はそのに對して相対的な意味で大学卒業の学歴は家族的背景から独立した形

動力を与える」と述べ親の社会的地位の影響と比較して教育の役割を同等くらいに評価している。

「父の地位・学歴、本人の地位相互間のガンマ係数」を算出した実田は、日本の場合、他国に比べて「父の地位・学歴→本人の学歴→子の地位」という二段のパス・システムのなかでも「本人の学歴」が相対的に高いことを報告している。また小林も文部省の「進路状況」報告より青少年の進路に学業成績が如何に大きく関与しているかを分析し、能力主義体制下では教育機会における階層差を明らかにするだけでなく「教育における能力による差別」研究の視点をもちことを主張している。さらにOECD教育調査団は「教育政策のうそで知識伝達の技術的な問題の才が、制度が生徒の人間性に与える影響のような根本的問題より軽視される傾向がある。幼稚園の段階ですら知識の注入が大いに強調される」と能力・学歴主義から転ずる知識注入主義を批判している。

以上のような日本の社会集団、教育集団の思想的分極化、孤立化を打破するには、子どもたちの受けてくる圧力をできるだけ軽減し、もっと自由を与えておくことにより、民主的なコミュニケーションと主体的な妥協による意思決定の能力を培い、さまざまな見解が共存し比較対照が可能になるようなければ個別的主体化の場合に学校に保障することが重要であると予想される。

社会化と教育の概念

従来の社会化理論と教育研究との関連をめぐって次のような問題点が残されていた。

1) 社会化と教育の概念の相関が不明

2) 社会化の内容、方法が個別に扱われ方々

ナカズムの理論が明らかにされにくかった

3) 教育体系と社会体系との構造的・機能的連関

4 明確化

4) 家族、仲間、学校、職場の相互関係と比較考

察(子ども)を分析的・操作概念的・内発

社会化と教育との関連を概念化する場合社会化を単に好まざる文化的同一性を獲得する過程としてとらえるだけでなく、その同一性への子どもの反応の差異に注意する必要がある。そこでここでは社会化「子どもが特定の集団の文化的同一性に反応するが、それを獲得しつづける過程を規定しておきたい。前述のように教育・家族の原理を内包している家族、学校の各々が階層文化を反映し、子どもの学校への反応の差異が言語的・社会的に表現される」という仮説が考えられる。この反応は複雑な社会化の諸結果を包摂しているため、結局は学校の *educability* の問題になる。

educability は社会構造としての家族的秩序 (*symbolic orders*) とその間の関係の問題であり、「家族、仲間などの力関係の稀釈された結果」と指している。一般に人間の可塑性と価値的に引き出す作用として定義される教育を社会化の一過程と考えることが出来る。しかし社会化が集団依存的・自然過程に重点をおく体系・機能的な *output* と起点とする回復的傾向をもつ概念で、*me* を形成するのに、教育は人間性・創造性・自律性という主体的自取 (*モード* の I) の形成に関与する働きを以て理念・先入・革新的志向性が強く、*input* と捉えらるべきである。自然的過程としての社会化の場合には能力の点で個人の社会化の上で一歩の遅れがみられる。教育は対個人的な機能の側面からみて社会化の形式的指導の役割をこなしている。

3. 言語コード *language code* と *educability*

バーニエスタイン (B. Bernstein) は、彼のコード理論により社会構造、言語の使用法と子どもの社会化との相互関係を明らかにしようとした。以下彼の理論を子どもが言語と *educability* の問題を身についてみたい。人口調査地域や農村地域、労働者階層の子どもが中流階層の子どもに比べて言語 IQ テストの得点、抽象概念理解の困

難さが言語能力の発達の遅延のみならず、言語的発達の過程にあり及ぶ文化的後進性によるものと仮定し、彼はこれをコード理論で分析する。コード (*code*) とは人が外から入ってくる信号を処理する中で受容し、それに對する自分の考え、感覚を表現してゆくその過程を規定する「まり」と意味し、話し手が意味を構成するためにとりあげる構文の形式を予想する難易により制限コード (*restricted code*) と推論コード (*elaborated code*) にわけられる。前者は表現形態が具象的・描写的・分析的・抽象的な普遍化が困難で、個人の経験と結びついて表現するのを制限すること社会関係を閉鎖的に規制・強化する機能をもち、後者は話し手が意味を構成するに広範囲のことはストックから選択するため、こぼれの配列が予想できにくく、対象と結びつくことが適切に熟考することの配列を達成する努力を強いるコードである。集団との関連では制限コードが集団 (文脈) 依存的で、集団のコミュニケーションの可能性を構成し、その社会関係を排他的に強化し、それに對し推論コードは個別化された反応・位置の可能性を創造し強化するよう働きかけることが出来る。バーニエスタインは中流階層の家族の中心は制限・推論の両形式がみられるのに、労働者階層では制限コードに限定された家族の比率が高いことを発見し、この労働者階層の子どもが中流階層の文化を反映する学校に入学する際、かかしの文化的不利益を問題視している。制限コードには手振り、身振りなどこぼれ以外のチャネルが多く、またその集団特有のことは同じ意図、経験を伝える他方向があるため、異なる役割関係や「他者の経験」を重視するなどのコミュニケーションに取換えるのが困難である。この異なる社会階層の子どもとの間にある *educability* の社会的先行性 *antecedents* に関する必要がある。制限コードから推論コードへの変換の役割をこなすのが教育の組織である。次に学校モデルに推論コード、I (モード)、他者の自己現在を *over We* 意識と示す集団的特性に限定して考察する。

4 開放型学校モデル

教育の知識はカリキュラム、教授法、評価の各
位言系 (message system) と通して学習者に伝
達されるが、下図はカリキュラムの位言系の基礎構
造を決定する「類型(classification)」と教授法の位言
系の構造を決定する「枠(frame)」という操作概念を用
いてつくられたモデルである。

— 類型		+ 枠	
異質的・多様な編成は可变的 (集団の構成)	同質的・一様な編成は固定的	意味は個別化され、価値を	増し、語の配列の選択は柔軟
問題の設定・創造、認識方法の強調 (教授法)	解答の提示、知識の内容・態様の強調	になり、コードはより精緻	な方になる。
教授上の役割は協力的、相互依存的 (教師)	教授上の役割は相互に孤立的		
教師の権限と人間関係は流動的	教師の権限と人間関係は固定的	開放型とは新しい意味	を完成し、各要素的に直交
教科間の境界は不明確 (カリキュラム)	教科間の境界は明確 (相対的独立性、統合性は高い)	拡張性があり、かつ含み込	みの動的な変化が起これ、そ
共通のカリキュラム	能力別・7割カリキュラム	は、この意味の構成に	際し、瞬時に孤立性に
グループの異質性や差異性を重	グループの不平等性と差異性を固定し	対峙することを目指すこ	とが可能になる。
えるさまざまな社会集団の選択領域	に固定する固定した社会集団・選択領		
は大、多様なものが向上意欲を促す	域は小、向上意欲を促すのは少数		
権限と人間関係は流動的	権限と人間関係は固定的		
参加・協力的 (式の挙行)	垂直・支配的		
不平等性 (外部との境界関係) 無き	有き		
種別的な成員を擁した広範囲 (内部組織)	種別的な成員をより相対的に狭い範囲	前述のように、学校は階層	的領域として、文化に不干渉
の統合的な下位集団で、役割づけ	の統合的な下位集団で、役割づけ	のコードのトータルな理	境にあり、その中で、権限
は必ずしも、すべての生徒が自己の能力	は必ずしも、能力をより完全に限定される	コードの交換を導き、	学校が影響力を群衆
フルに發揮する機会を有する			する最も基本的な多様な
学習者は力の行使は限定されているが、	学習者は教師の命令下におかれ、その		と権限を行使することになる。
教師とは別な広範囲の領域を有する	広範囲における力の行使が認められる		
生徒が学習の決定に影響を及ぼす機会	生徒の学習意思決定の影響を及ぼす		
する自己決定の機会はない	自己決定の機会が限定		
管理は学級委員の手に委ねられる (教師生徒の権限関係)	管理は公然化された権限関係にある		
儀式化される			
教師-生徒の別は階層的、非対人的	教師-生徒の別は階層的、非対人的		

「類型」とは「分類された」内容そのものを指すのではなく、内容間
の分化の性質に関連した概念で、異質性・多様性 (十) と
これは内容そのものが強い境界線により相互に分離している
ことを示している。「枠」は全知識の伝達を管轄する文脈
の形式に関連し、教師-生徒間の特定の教授関係に
関連している。強い (十) 枠は選択の自由を減少させ、
弱い枠は広い選択の自由を認めることになる。

閉鎖型とは「この意味の出現に打
する個人の選択の範囲を縮小する役割体系をもち
・選択の範囲が縮小すればするほど、この意味の意
味は集団共有的になり、構文は単純化し、この意味の
出現は柔軟性で失い、コードはよりより限定さ
れたものになる。他方開放型は「この意味の出
現に打する選択の範囲を許容する役割体系をもち、

選択範囲の拡大によりこの意味の
意味は個別化され、価値を
増し、語の配列の選択は柔軟
になり、コードはよりより精緻
な方になる。

開放型とは新しい意味
を完成し、各要素的に直交
拡張性があり、かつ含み込
みの動的な変化が起これ、そ
は、この意味の構成に
際し、瞬時に孤立性に
対峙することを目指すこ
とが可能になる。

前述のように、学校は階層
的領域として、文化に不干渉
のコードのトータルな理
境にあり、その中で、権限
コードの交換を導き、
学校が影響力を群衆
する最も基本的な多様な
と権限を行使することになる。

今後、よりより個人のミニマルな
連の可能性を含み込める権限コードを「人」
「もの」の意味を問ひ、その自由の創造的・行
動を形成する「これは」学校集団最適化の理論的
モデルを精緻化するに役立つことが重要な課題と
なる。